

文化的景観を形成する小石原窯業の実態調査

九州産業大学大学院 学生会員 ○河野玄貴
九州産業大学 景観研究センター 丸谷耕太・山下三平

1. はじめに

窯業の里の立地と文化的景観の形成には、自然条件が大きく関係していることは言うまでもない。その主要な条件は、1) 陶土や釉薬の原料、2) 陶土の精製や唐臼の動力に使用していた川の水、および3) 窯を焚く燃料となる薪である。しかし現在、焼物とこれらの必須の自然環境（土・水・木）との関係は、立地の当初と必ずしも同様でない。

福岡県東部に位置する旧小石原村（現東峰村小石原）は、民芸運動の父である柳宗悦や英国の陶芸家バーナード・リーチ、さらには棟方志功も訪れた民陶の里である。小石原焼は1682年に創始され、明治末期から大正時代にかけて、伝統的な窯業を行っていた。唐臼の音が響き、登り窯の煙突からは煙が立ち上っていた。しかし1950～1960年代の民芸ブームによる需要の増加により、伝統的陶業システムに機械化が行われた。陶土を砕く唐臼は電動の粉碎機に変わり、人力での土練りは真空土練機に変化した。また、1975年に協同組合が設立し、陶土や釉薬を自分で採取せずとも購入することが可能になった。さらに、ガス窯が導入され、登り窯の使用が減少し、薪は業者から購入するようになった。

以上のように小石原焼の里は近代化を受け入れることにより、自然環境との関係が大きな変容を見せた。文化的景観のあり方を問う上で、伝統と近代化のバランスを考えることは必須である。経済産業大臣指定伝統的工芸品である小石原焼の作陶と、これを支える自然環境との関係の変遷を詳細に調べる意義は大きいと考えられる。

そこで本研究は、小石原窯業と自然環境との関係の変遷を追究し、窯業に基づく文化的景観保全のための、基礎的知見を得ることを目的とする。本稿はとくに、窯元の意識から、この関係と調査した結果を報告する。

表-1 調査の概要

調査方法	アンケート調査 個別配布、郵送回収
調査日時	2012年11月（1日配布、8日、17-18日回収）
調査対象	小石原焼陶器協同組合加盟の窯元全44軒
回収率	41/44軒（93.2%）

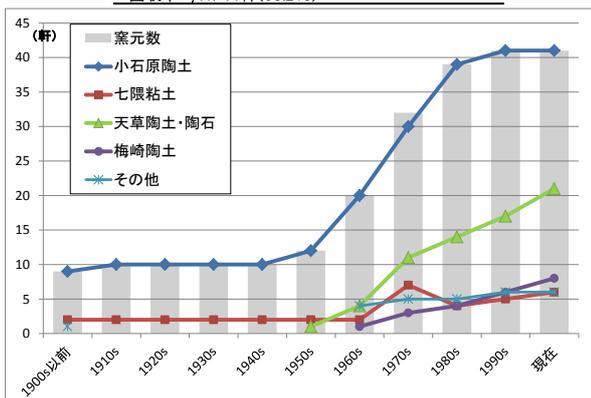


図-1 窯元数と陶土の変遷（選択肢回答）



図-2 小石原のようす



図-3 小石原の登り窯

2. 調査と分析の概要

福岡県朝倉郡東峰村の小石原焼協同組合に加盟している窯元44軒を対象に、アンケート調査を行った（表-1）。アンケートでは、原材料の変遷、水の利用の変化、窯の変遷と薪の使用状況、小石原焼と町との関係、窯元の状況の計5項目の実態と意識を尋ねた。本稿では自然条件（土、水、木）の分析を行った。

3. 小石原焼と自然の関係

3-1 土—陶土使用の変遷と釉薬の入手先

「産地内陶土に対する意識(37軒90%)」「陶土使用の変遷(35軒85%)」を尋ねている。また、「釉薬の変更・導入への意識(40軒98%)」「使用している釉薬と入手先(40軒98%)」も調べた。なお、釉薬には一部鉱物以外のものを使用している場合もある。

陶土の産出地は産地内が良いと答えた窯元は78%と最も多く、産地内の原材料の重要性が認識されている。しかし、「どちらでもよい」と考えている窯元も8%おり注目すべき点である。よい原材料があれば産出地はどこでもよいという考えがあることが推測される。

小石原陶土は1970年代を除き、開窯時に導入され、現在もすべての窯元で基本的に使用されている（図-1）。一方で他産地陶土は1950年代～60年代にかけて導入され始め、現在5軒以上が4種類導入している。他産地の陶土のうち最も多く導入されているのは熊本県の天草陶土である（21軒51%）（図-1）。福岡市の七隈陶土は1900年以前から使われていたが、1970年代をピークに減少する（図-1）。これは七隈陶土の代わりに他の他産地陶土を導入したからである。現在全体として、7種類の他産地陶土が導入されており、それぞれの窯元の陶土の使用に独自性がみられる。

一方釉薬は、変更・導入に対して「よいと思う」という窯元が56%、「替えたくない」という窯元は15%のみで、釉薬の導入には陶土以上に寛容である。

窯元が個人的に採取を行っている釉薬が9種類ある（図-5）。また木灰（30軒73%）、藁灰（25軒61%）、透明釉（14軒34%）、さび（19軒46%）、銅（18軒43%）は、いずれも10軒以上の窯元で使われている（図-5）。これらの釉薬は、小石原付近での採取や自家精製が容易にできるものと考えられる。

表-2 窯元ごとの窯の変遷（選択肢回答）

開窯時	現在までの変化	開窯年										合計
		1900s以前	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	
薪	薪⇒ガス	4	1					3	2			10
	薪+ガス	4					1	3	1	1	10	
	変化なし	1									1	
薪+ガス	変化なし								2		2	
	ガス+薪					1		1	1	1	4	
ガス	変化なし						1	7	3	1	12	
	変化なし						1	1			2	
無回答											2	
合計		9	1	0	0	0	2	8	12	7	2	41

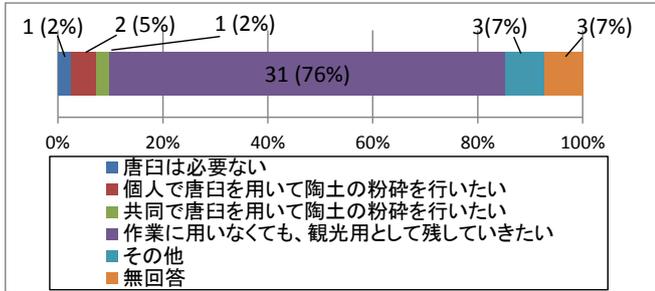


図-4 今後の唐臼の利用（選択肢回答）

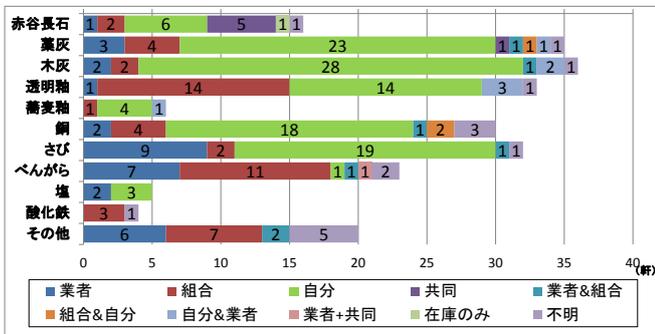


図-5 釉薬の使用状況（選択肢回答）

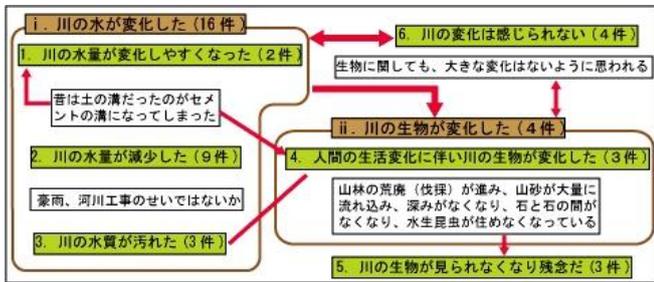


図-6 川の変化への意見（自由記述）

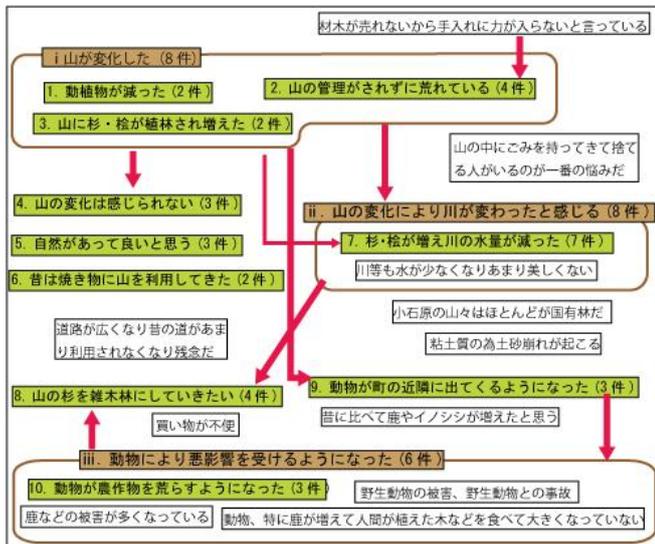


図-7 山の変化への意見（自由記述）

釉薬を共同採取しているものとして赤谷長石（5 軒 12%）と薬灰（1 軒 2%）がある（図-5）。

3-2 水—唐臼の利用法と現在の取水地との関係

「水が作陶に与える影響（21 軒 51%）」と、商品の質に与える影響の有無（20 軒 49%）」、「今後の唐臼の利用法（38 軒 93%）」、および「川の変化や川との関係（15 軒 37%）」を尋ねている。

「唐臼は必要ない」と答えた窯元はわずか 1 軒（2.4%）であった（図-4）。31 軒（76%）の窯元は「作業にもちいなくても観光用として残していきたい」と考えている。一方、個人や共同で唐臼を使用したいという意見は 3 軒（8%）のみであり（図-4）、唐臼を作業に用いたいと考えている窯元は少ない。

「川の変化や川との関係」は回答率が低く、川への関心は低いことがわかる（図-6）。「2. 川の水量が減少した（9 件）」、「3. 川の水質が汚れた（3 件）」など、川の水が変化したことを示す意見が 16 件あったが作陶に關係する意見はなかった。

3-3 木—薪の利用方法と山への意識

「現在の薪の使用状況（32 軒 78%）」、「窯元ごとの窯の使用状況（40 軒 98%）」、および「周辺の山の変化や山との関係（24 軒 59%）」を尋ねた。

現在 31 軒（76%）の窯元が薪を入手しており、そのうち 15 軒（37%）は薪窯に使用している。薪窯で開窯後、ガス窯を併用している窯元が 10 軒、ガス窯で開窯後、薪窯を併用している窯元が 4 軒ある（表-2）。これらの窯元は薪で窯を焚くことにこだわりをもっている。それだけでなく 2000 年代に共同の登り窯が 2 基復活した。薪はストーブの燃料として使い、灰を釉薬に利用することがわかっている。薪を入手しているが薪窯を使用していない 16 軒（39%）は、薪を生活や木灰調達のために使っている。

「山の変化や山との関係」を問うと（図-7）、「i. 山が変化した（8 件）」という回答があり、「2. 山の管理がされずに荒れている（4 件）」という意見があった。また、周辺環境の変化への意見が多く、「7. 杉・松が増え川の水量が減った（7 件）」といった川との関係を示す意見があり、「8. 山の杉を雑木林にしていきたい（4 件）」という希望が確認された。

4. おわりに

土、水と木を比べると、窯元にとって土すなわち陶土が最も重要な要件であることが、今回の調査から明らかになった。しかしそれは、小石原陶土にこだわりながらも、他産地の陶土を導入するという形態に変わっている。一方、川との関係は希薄であるが、唐臼の重要性は認識されている。また薪窯の使用への意識は高く、登り窯の伝統を後世に残そうとする動きがみられる。このように水と木についても、立地当初とは異なるものの、新たな意義が与えられつつあることが垣間見える。焼き物の里の文化的景観表象の、新たな認識といえそうである。

本研究では、アンケートを補うヒアリング調査も行っている。今後、景観構成についても分析を行う予定であり、今後その結果を随時報告したい。